

東洋史研究

第五十九卷 第一號 平成十二年六月發行

明末の文人李日華の趣味生活

——『味水軒日記』を中心に——

井 上 充 幸

はじめに

一 文房清玩趣味の流行

(一) 李日華の趣味生活

(二) 大收藏家の出現

(三) 書畫骨董市場の擴大

(四) 贋物の氾濫

二 文人と山人

(一) 山人の活躍

(二) 李日華と山人

(三) 文人と山人の境界線

おわりに

はじめに

1
李日華（一五六五—一六三五）は、字は君實、號は九疑・竹嬾道人、嘉興府秀水縣の人である。⁽¹⁾詩文・書畫に巧みで、書畫・骨董の賞鑒に卓越し、明末の著名な文人として、王惟儉・董其昌らと並び稱された。萬曆二〇年の進士であるが、官僚としての業績にさほど見るべき程のものは無く、「後先家食すること二十餘年」⁽²⁾と評されたように、通籍四十四年の

ち、立朝は十年足らずであり、その間「田里に優游し、法書名畫を以て自ら娛しむ」⁽³⁾ 毎日を送った。兩親の喪に服していた計六年を除き、名目上は病氣休養とはいえ、二十年以上にわたって自發的に郷里の嘉興に家居していたことになるが、例えば李日華の先輩格に當たる董其昌は通籍四十四年のうち「家食すること二十年」⁽⁴⁾ といわれたように、明末には、官位を有しながら、内憂外患に激動する政界をよそに、郷里で悠々自適の趣味生活を送る文人が相次いだ。主な著書に『六軒齋筆記・二筆・三筆』、『紫桃軒雜綴・又綴』、文集に『恬致堂集』がある。⁽⁵⁾

李日華の書き残した『味水軒日記』は、萬曆三十七年（己酉・一六〇九）正月一日より同四十四年（丙辰・一六一六）一二月四日まで、一年に一巻を配し、全八巻から成る詳細な日記である。この頃彼は、母の喪に服するため歸郷し、その後も引き續き老齡の父への孝養や自らの病氣を理由に家居していた。途中幾度か中斷があるものの、郷里の嘉興で悠々自適の生活を送る李日華の日常を伺うことができる。⁽⁶⁾ この當時の感慨を自作の小景に題して「雲氣の堆中に屋を結び、樹陰の薄處に書を攤つ。廿載懶骨を養成し、閉門して新除を拜さず」⁽⁷⁾ と、李日華は言っているが、日記の記事を読む限り、なかなか忙しい毎日を送っていたようである。

彼を取り巻く人間關係は、身分の高下を問わず大變に幅廣いものであり、そこで取り交わされる言説・物品も、これまた多岐にわたるものであった。それらの局面で伺える李日華の顔は様々であり、濱島敦俊氏は、李日華が均田均役改革に反對した記事を取り上げ、當時の江南における典型的な城居の郷紳地主としての李日華を紹介された。⁽⁸⁾

また、古原宏伸氏は、明末の繪畫に對する批評が、前人の文獻・畫學書の引用・整理に終始するのが主流であった中で、隨筆・日記という形式によって、自由に批評を展開した李日華の獨自性と限界を、董其昌との對比において述べられた。⁽⁹⁾

嬌子肇亨の序文に「其の間に紀す所、緡閑せる書畫、評隲せる翰墨、十の八九に居り」と述べられているように、李日華の本領が現れているのは、やはりこうした書畫骨董・詩文翰墨をめぐる記事においてである。本稿では、彼の文人とし

ての側面に焦點を當て、彼の私的な日常生活の様子を通じて、彼を取り巻く文化狀況、とりわけ彼が平生愛好して止まなかった文房清玩趣味の世界が、明末に至って變化してきた様子を探っていきたい。

一 文房清玩趣味の流行

文人とは、「士人が公的活動から離れた私的生活において自らの嗜好に従って發現させる姿」であり、「士人でない文人はエセにすぎ」ないと定義される存在である。⁽¹⁰⁾ 文人と士大夫とは本來表裏一體であり、個人の趣味生活に重きを置くが、それは本人の精神性の發露でなければならず、趣味自體に溺れることは玩物喪志として戒められ、まして専門家として生計を得るなどは論外であった。この趣味生活の中心となるのが「文房清玩」であった。

中田勇次郎氏によれば、⁽¹¹⁾ 文房とは文人の書齋であり、北宋の時代に入り、歐陽脩、蘇軾、米芾など、當時を代表する士大夫達によって確立された。蘇舜欽の「明窓淨机、筆墨紙硯みな精良、またおのずからはれ人生の一樂なり」（歐陽脩「試筆」）という言葉はその理想を表すものとして名高い。文人は書齋の中に書畫を始めとして、金石碑帖・古銅器・筆・硯・墨のいわゆる文房具から、座右の器玩・服飾・その他室内の諸施設など、また茶・花・香・園藝に至るまで、様々な調度品を取り揃え、客と清談を交わし、諸種の品物を清玩し、文人生活のあらゆる方面にわたってその趣味性を發揮した。

文房清玩に關する専門的な研究書が登場したのは宋代からであり、南宋時代に入り、山林に住む道士の閒で趣味生活が體系化された。やがて明代に入ると、その趣味は一層細分化され、洗練される。とりわけ、明末に至って文房清玩趣味が對する關心はかつて無い高まりを見せ、蘇州を中心とする江南の諸都市で大流行するに至った。この時代の文房清玩は、もはや内輪同士の私的な楽しみという範疇から、大きく逸脱し始めたのである。

(一) 李日華の趣味生活

李日華の一族と縁戚關係にあり、しばしば李日華のもとを訪れていた沈德符は、「近年士大夫、太平の樂を享し、其の聰明を以て之を剽技に寄す」と述べ、當時、詩文・書畫のみならず、器樂・戲曲の創作・蹴鞠から、茶の湯・骨董の賞玩が流行したことを記す⁽¹²⁾。

書畫骨董への熱中ぶりは、李日華自身人後に落ちなかった。『味水軒日記』の内容の八割ほどを占めるのが、李日華のもとに毎日のように持ち込まれてくる、あるいは自ら求めて看閲した書畫骨董・詩文の品評に關する記事である。とりわけ書畫に關しては、その形態や内容を克明に記録し、名士の手になる題跋が附されていれば全文筆寫する、という念の入れようで、いかに彼の關心が高かったかを物語る。例えば、高濂家藏の王維『輞川圖』を觀閲した記事には、

高瑞南の子麟南を訪ぬるに、其の所藏の郭忠恕復寫摩詰『輞川圖』を出す。上に内合同印、元人袁桷の跋有り。又た廬陵李珣字元暉なる者本末を敘述せる有り。云えらく、「是れ忠恕江南李後主の命を奉じて復寫せる者なり」と。卷長三丈、樹石は精微を極め、山に勾砍有り。略や用筆滄澹にして、所謂松針石脈は、別して興趣有り。余の見る所の廬鴻『草堂圖』、王右丞『江山雪霽卷』は、此れと鼎立す可し⁽¹³⁾。

とあり、その三年後の萬曆四〇年二月一八日に再び觀閲した記事には、『輞川圖』に捺された收藏印から、繪の布置、袁桷や董其昌らの題跋の全文に至るまでをこと細かに記し、自らも題跋を記して、「此の卷の題字に奉命復本と云えるは、正しく其の所傳の本を復せる耳にて、摩詰の迹に臨むに非ざるなり」などと考證を加える⁽¹⁴⁾、といった具合である。またその他にも、王羲之『十七帖』・張擇端『清明上河圖』などの著名なものから、同時代の文人達の手になる作品に至るまで、それこそ枚擧に暇がないほどである。また、「六研齋」と號したように、硯の愛好癖も相當なものであり、例えば萬曆三十九年六月五日の條では、王世貞舊藏の「洮河卵石硯」を觀閲して「絕佳の品なり」と品評した後、

余、趙希鵠『博古明辨』を案するに、云えらく、「石、臨洮の大河の深水中に在れば、漚取す可からず。之を得る者は以て希寶と爲す」と。『格古要論』に又た云えらく、「火點有る者は佳」と、今此の硯を驗するに、火點二有り⁽¹⁵⁾と、博識ぶりを披露し、また「七星泓硯」を入手した喜びを、硯函の上に記したりもしている⁽¹⁶⁾。

この時代の收藏家の賞鑒・蒐集の対象は、書畫骨董など書齋の中の身の周りの品々のみならず、茶や酒、庭木や庭石に至るまで一層その幅を廣げた。例えば、日々各地の銘茶を嗜んでいた李日華は、齋室を「味水軒」と名付けたごとく、茶を點てるための水にも深くこだわった。彼の「松雨齋運泉約」によれば、⁽¹⁷⁾銀三分の契約で舟を雇い、銘水を汲ませており、『味水軒日記』にも、

二十六日、冬至に入る。時晴暖にして雨雪無く、河流枯涸し井泉淤墊す。人をして掉舟にて先月亭下に至り、水八缶を取りて之を澄ま令め、瀾茗の需と爲す。所謂秀水なる者は是れなり。……邑是れを以て名づくも、而れども人貴きを知らず。眞に日用すれども知らざる者、嘆く可きなり⁽¹⁸⁾。

という記事がある。

李日華の私的な趣味生活の實例を紹介していくと、それこそきりが無いが、當時の江南の文人達は、こうした趣味を媒介として交際の輪を廣げていった。彼らは、自らの蒐集した玩物を互いに持ち寄り、茶や酒を酌み交わしながら品評しあい、互いに詩文や序跋や讀を書きあって日々娛しんだのである。

中田勇次郎氏が「明人には清供の癖があるといわれるように、この時代の特色は、文人の趣味性によってきわだって大きくあらわれる⁽¹⁹⁾」と指摘されるように、當時の文人達の多くは、表向きは平穩で華美な太平の世にあって、生活の私的な領域において餘技に熱中した。「癖」とは、單なるくせではなく、度外れの趣味であり、狂氣じみた嗜好のことである⁽²⁰⁾。もちろん文房清玩趣味についても例外ではなく、明末には書畫骨董に耽溺し、その蒐集に血道を上げる者が續出した。とりわけ江南には、このような好事家が少なくなかったのである。

(二) 大收藏家の出現

沈徳符は、

嘉靖末年、海内宴安にして、士大夫の富厚き者、以て園亭を治め、歌舞之隙をして、古玩に閒及せ教む⁽²¹⁾。

と述べ、當時の著名な收藏家として韓世能、項元汴、董其昌、王世貞らの名前を挙げ、彼らが金に糸目をつけず、争つて書畫骨董を購入したことを記す。このような蒐集にかけては、元來宮廷が最も有力な機關となるが、明末には、とりわけ江南を中心に大規模な蒐集量を誇る收藏家が多數輩出した。

李日華自身の收藏についてはまとまった記述は無く、たとえば「風雨深秋の如く、虛堂無事たり。因りて所藏せる元人の六逸妙蹟を出し之を展觀す」といって、趙孟頫、馬琬、倪瓚、趙原、方從義、林卷阿らの作品を取り出すなど⁽²²⁾、『味水軒日記』の記事では時折觸れられるだけである。本人は「魯得之」余の家に古繪の名品を蓄うと妄意すれども、而れども其の鮮有を知らざるなり⁽²³⁾」などと謙遜してみせるが、

甲子冬十二月四日、春波の舊居の改構築成す。移居之前の一月、大都の書畫の十之九、牀几・琴硯・奇石・古敦彝の十之五を搬運す。而れども他物は僅かに用いるに足る。亦た先君の舊器は破裂せる者多けれども、棄てるに忍びざるなり。……余後人に貽す所の者は書畫の二事、未だ精麗なる能わずと雖も、然れども亦た龕ほ玩索に備うるに足る⁽²⁴⁾。

という記事もあり、相當な量の書畫骨董の類を收藏していたようである。⁽²⁵⁾
この當時、最も著名な收藏家といえ、李日華と同郷の項元汴（字は子京、號は墨林）である。彼の一族は代々富裕で、明一代を通じて官界に進出する者が相次いだ。彼自身は終生仕官せず、家産を注ぎ込んで書畫骨董の蒐集につとめた。李日華が、「此君の藝事、種種味有れども、其の多貲を挾めるを以て、故に江湖の閒に止だ其の收藏好事を傳うる耳⁽²⁶⁾」と評したように、文人としての名聲以上に、書畫骨董に對する並外れた蒐集欲や執着心を傳える逸話によってよく知られた人

物であった。朱彝尊によると、

其（項篤壽）の季弟子京、善く生産を治めて富み、能く古人書畫金石文玩の物を鑑別す。所居は天籟閣、質庫に坐して估價し、海内の珍異、十の九は多く之に歸す。顧るに財に吝にして、交易既に退し、豫價或いは浮なれば輒わち悔やみ、憂い色に形れ、罷飯して瞰ざるに至る。⁽²⁷⁾

とあり、また、姜紹書はこう紹介する。

項元汴墨林、嘉隆承平之世に生まれ、資力雄贍にして、素封之樂を享け、其の緒餘を出して、法書名畫及び鼎彝奇器を購求す。三吳の珍祕、之に歸すること流るるが如し。王弇州は之と時を同じくして、風雅を主盟し、名品を蒐羅し、餘力を遺さず。然れども所藏は墨林に及ばざること遠甚たり。……名蹟を得る毎に、印を以て之に鈐し、累累として幅に滿つ、亦た是れ書畫の一厄なり。……復た其の價を楮尾に載せ、以て後人に示す。此れ賈豎の帳簿を甲乙すると何ぞ異ならん。⁽²⁸⁾

項元汴のもとには、彼の所藏する書畫の數々を翻閱するために、數多くの文人が訪れた。董其昌もその一人であり、しばしば天籟閣を訪れて古畫の研究を行い、彼の畫學を大成した。⁽²⁹⁾ 李日華が項元汴と面識があつたかどうかはつきりしないが、項元汴の子供、及び孫の世代との交友があり、これら一連の項氏の收藏品を觀閲することによって養つた鑑賞眼が、賞鑒家としての彼の名聲につながつたことは確かである。また、『味水軒日記』には彼の題跋が附された書畫がたびたび記録されている。

『味水軒日記』には項元汴の第三子德新（字は又新、號は復初）、及び第五子の德宏（字は玄度、號は晦甫）の名が見える。德新は書畫に巧みで、李日華は「竹枝の寫生を善くす。余の書畫の友なり」と評している。⁽³⁰⁾ 陳繼儒も彼のもとを訪れて、彼の所藏する元人の書畫を閱覽している。⁽³¹⁾ 德宏も多くの書畫を所藏しており、李日華は彼の所で盧鴻「嵩山十志圖」、趙孟頫「落花游魚圖」、王蒙「花溪漁隱圖」などを鑑賞し、それらに附された題跋を記録している。⁽³²⁾

嘉興にはもう一人、汪繼美（字は世賢、號は愛荊居士）が收藏家として名高い。彼も項元汴と同じく官途につかず、庭園を修築し、凝霞閣と眞賞齋を建て、收藏品を収めた。李日華は「汪愛荊居士傳」を残している。それによると、

性は傳記を披覽するを喜び、異書精刻に遇えば、輒ち厚直にて之を購ひ、古名賢の書畫奇蹟と與に、滿樓に雜置す。

風雨の閒暇に即ち樓に登り、卷帙を手披し、呶哦して自ら快なり。……性又た善く古鼎彝環珞を鑑し、左右に陳列

し、居恆摩挲玩繹す。……居士前に交遊する所は項子京・錢滄洲・周服卿・張伯起・王百穀・孫雪居・項貞玄・郁伯

承・朱君升、近きは則ち董玄宰・陳仲醇・俞羨長・高元雅・萬蓋卿・釋舷公、皆其の圖詠品題を得、箱に盈ち笥に溢る。⁽³³⁾

という人物であった。その長子何玉（字は玉水、號は樂卿）も父の收藏品を引き継ぎ、李日華をはじめ多くの文人と交際した。著書に『珊瑚網』四八卷があり、歷代の書畫論、收藏品目などを収める。李日華はたびたび彼のもとを訪れて書畫骨董の數々を參觀している。

石氏考鴻昆季と共に汪玉水の齋頭に過る。菡鼎一、文鼎一を閲す。俱に青翠徹骨、愛すべし。趙子昂『唐馬』、未だ眞ならず。文衡山『夜泛赤壁圖』、陳白陽の草書賦、俱に眞。又た陸五湖『覽勝圖』、筆意は子久に仿ひ、而して秀潤なること常と異なる。五湖の畫多くは見ず、益々知希之貴きを覺ゆ。又た項子京三塔の僧鑒慧の爲に作せる『行脚圖』長卷、蕭灝秀逸にして、元の徐幼文・曹知白と相頡頏す。⁽³⁴⁾

この他にも、彼の所藏する吳鎮畫冊、文徵明『山水』、王龍行草などに、李日華は題跋を附している。⁽³⁵⁾

これ以外にも、李日華は多くの人々の所藏する書畫を觀閲し、作者名、作品名、及びそれらに附された題跋印記などを『味水軒日記』に記録しているが、そうした記録を網羅した書物が多數刊行されたのは、明末に至ってからのことであった。それ以前の時代にも收藏家として知られ、自らそのことを誇る者は當然存在していたが、余紹宋『書畫書錄解題』卷六「著錄」の「一家所藏」の項目を見ると、個人の蒐集にかかる收藏品の目録で、個々にわたって詳細に記録して列擧し

たものが登場するのはこの頃であり、その具體像を知ることができる。まず注目されるのは、優に一冊の書物となるほどの、收藏量の豊富さである。

この時代、一個人として最大級の收藏を誇ったのが嚴嵩である。嘉靖四四年（一五六五）に彼が没して後、彼の財産は朝廷に籍没されたが、その際の沒收品の目録が『天水冰山錄』一卷である。この目録は、まず金・銀製品を列挙してその總量を兩で表示し、續いて、錦絹や書畫骨董などの奢侈品から、土地家屋にいたる嚴氏の財産を記録し、換金可能な物はその賣價を銀で表示する。その中で書畫骨董の類は、「古今名琴」五四張、「古銅器」一二七件、「石刻法帖墨蹟」三五八軸冊、「古今名畫手卷冊頁」三三〇一軸卷冊、という膨大な數に上る。これらはいずれも收藏家垂涎の品々であり、沈德符によると、これらの品々は、一旦朱希忠の手にわたった後、張居正に讓渡され、さらに張居正が籍没された後、韓世能や項元汴らが争ってこれらを購入したという⁽³⁷⁾。この間の事情は、王世貞『觚不觚錄』にも記されている。

張丑は、自らの一族の歷代收藏品を記した『清河書畫表』一卷を記している。高祖元素の蒐集から自らの所藏に至るまでの七格に分類、計四九帖一一五圖を記録している。張丑の父張應文は、沈周や文徵明と交友があった人物であり、自らも『清祕藏』二巻を著している。その中で、自らの收藏品の目録を載せているが、品目別に見ていくと、「古銅」二〇點、「古玉」一五點、「法書」三點、「名畫」四點、「法帖」三點、「審器」三點となっている。四庫提要の記述は「丑の表の列する所、殆ど亦た夸飾にして、其の富は盡くは信するに足らざる歟」と疑義を呈しているが、ただし自序によれば、この表を作成した時點で、張丑の家庭は經濟的な苦境に陥り、全てを手放さざるをえない狀況にあったという⁽³⁸⁾。

この他にも朱存理『珊瑚木難』八卷、汪珂玉『珊瑚網』四八卷、朱之赤『朱臥菴藏書畫目』一卷などは、それぞれの著者自身、もしくは交友關係にあった諸家の所藏する書畫に基づいて、題跋や所藏印とともに多數の名前を記録している。所載の全てが彼らの實際の知見に基づくものでない場合もあり、當時の蒐集の狀況を精確に示しているわけではないが、いずれにせよ、目録の形で羅列するほど、多くの人が多くの蒐集品を所藏するようになった狀況をかなりの程度反映して

いるといえよう。もちろんここまでに擧げた收藏家たちは、當時としても飛び抜けた存在であつたが、蒐集熱に取り憑かれた人々は、持てる者と持てない者とを問わず、書畫骨董を求めて血眼になつてゐた。董其昌に至つては、書畫骨董の購入資金を得るのに手段を選ばなかつたため、地元松江の民衆から焼き討ちを受け、收藏品が盡く灰塵に歸してしまつたことは、よく知られてゐる。⁽³⁹⁾當時の世相に批判的な記述を残した何良俊も、

余小時より即ち書畫を好み、……一たび眞蹟に遇えば、輒ち厚賞にて之を購ひ、産を傾けると雖ども惜しまず。故に家業日に貧薄に就くも、而れども所藏せる古人之跡、亦た已だ富む。⁽⁴⁰⁾

と述べているが、これは當時の蒐集家の偽らざる氣持ちであらう。

ともあれ、李日華の趣味生活は、これらの收藏家たちの存在抜きには成り立たないものであつたことは確かであり、彼らとの交友を日々重ねていくことで賞鑒家としての地位を築いていったのである。

(三) 書畫骨董市場の擴大

書畫骨董の蒐集が流行するにつれて、それらに對する需要は大幅に増加し、盛んに取り引きされるようになった。書畫骨董は商品價值を高め、一大市場を形成し、大量に流通しはじめたのである。李日華は、嘉興城内の骨董市の様子をこう記す。

沈翠水と同一に歩いて試院前に至り市を閱す。大靈壁石一有り、形は伏虎の如く、色は黝黑にして光潤、背面に元章の鐫記あり、又た横に列翠の二大字を鐫る。又た英石尖峰一、高二尺有五、闊二尺多、蹙浪文愛すべし。又た白定酒盃一、大なること能く斗米を容る。又た碧玉巾圈一對、雲裏天鷄を碾ぎ、頗る細妙。又た瑪瑙方圈一對、黃黑斑に就きて樹石雲月を碾作す、亦た妙。又た閣帖古本一部、斷裂紋無し、價は二百五十金。措大出游して隊を成し、率ね目飽せるのみ。⁽⁴¹⁾

とあり、市場の盛況を記している。閱市の記事は他にも度々登場し、蘇州の閭門にて王羲之『實際寺碑』・米芾『天馬賦』を購入、午後には虎丘に至り、珍珠蘭・茉莉などを購入したりしている⁽⁴²⁾。また、蘇州の織造太監孫隆が行った商業經營に關する記事において、四方から參集した商人たちが「珍奇玩物」を商ったことも記されている⁽⁴³⁾。

經濟的に繁榮する江南の各都市では市場が形成され、様々な書畫骨董が滿ちあふれた。とりわけ流行の中心地である蘇州をはじめとする江南の蒐集家の中には金に糸目をつけない者が續出し、書畫骨董を商う商人を介して投機的な賣買が行われ、その價格は急騰した⁽⁴⁴⁾。王世貞によれば、

畫は當に宋を重んずべし。而れども三十年來忽ち元人を重んじ、乃ち倪元鎮に至り、以て明の沈舟に逮び、價は驟かに十倍に増す。審器は當に哥汝を重んずべし。而れども十五年來忽ち宣德を重んじ、以て永樂成化に至り、價は亦た驟かに十倍に増す。大抵吳人が濫觴にて、而して徽人之を導く。俱に怪しむべきなり⁽⁴⁵⁾。

という状態であつたという。李日華の所にも、商人がひっきりなしに押し掛けてきたことは、『味水軒日記』に數多く記されており、中には「巨室の綱紀の僕」などといった人物までが、硯・香爐などを持參して彼のもとを訪れることもあつた⁽⁴⁶⁾。日華は、出入りの商人や骨董市の商店から主として硯や陶磁器などを購入している。また、賣買のみならず、自ら書畫骨董を蒐集する商人も登場する。

十七日、市を閱す。晩に販珠者葉賈の樓寓を過り、壁閒に郭忠恕『溪山樓閣』單幅を見る。筆意明秀、縑色沈古、眞迹なり⁽⁴⁷⁾。

一方で、經濟的に困窮し、せっかくの收藏を手放さざるをえなくなる者も多かつた。李日華の記述にもそうした人々が登場する。沈德符の兄の沈超宗は、日華の若い頃からの親しい友人の一人であり、書畫骨董を通じた交友が深かつた。

超宗齋中にて、蓄る所の鼎彝珣璣諸古物と法書妙繪とを出して余に示す。甚だ珍、甚だ富なり。超宗、手づから指畫

を爲し、殿最を品陶す。甚だ辨、甚だ核なり。⁽⁴⁸⁾

『味水軒日記』を書き始めた時點で、既に死後五六年経っていたが、ある時日華が、超宗の遺品を検査したところ、沈氏三代にわたって蒐集され「八萬餘卷を下らず」と稱された藏書は、半分近くが散逸し、「金石・繪事・祕玩の種種」は、殆ど残っていないかつたという。⁽⁵⁰⁾ また、盛徳潛は、死に際して、薪米に易え交游に酬いるために、多くの書畫雜迹を手放し、⁽⁵¹⁾ 死後僅かに手元に残った哥審の筆洗や倭漆の香爐なども、遺族の手で賣りに出されてしまった。⁽⁵²⁾

では、商品としての書畫は、具體的にどのような値段段で取り引きされていたのだろうか。文震亨は、

書價は正書を以て標準と爲す。右軍の如きは、草書一百字は乃ち一行の行書に敵い、三行の行書は一行の正書に敵う。樂毅・黃庭・晝贊・告擔に至りては、但だ成篇を得、計るに字數を以てすべからず。書價も亦た然り。山水竹

石・古名賢像は、正書に當つべし。人物花鳥の小なる者は、行書に當つべし。人物大なる者及び神圖佛像・宮室樓閣・走獸蟲魚は、草書に當つべし。⁽⁵³⁾

と述べるが、具體的な値段に關しては、各文獻に散見されるのみであり、一般的な相場を知ることには困難である。『味水軒日記』の嫡子肇亨の序文に「絶えて涉入せざる所の者は、月旦雌黃、陞除寵辱、種種の俗慮」とあるように、おそらくそれは、書畫の價格について公には口にしないのが文人同士の暗黙の了解事項であつたためである（米芾『畫史』）。また、そうであればこそ、項元汴が書畫の購入價格を末尾に記入するという行爲は商人のようであると非難された。

商人に對する非難は、單に清玩の具を投機對象とする彼らの行爲に對してのみならず、これまで書畫骨董などには無縁であつたはずの彼らが、書畫骨董を求めるようになったことに對しても向けられている。沈徳符は、安徽商人達が、見識も鑑賞眼も無いまま、金にあかせていかかわしい書畫骨董を買い漁る様子を皮肉っている。⁽⁵⁴⁾

こうした狀況は、明末の江南の諸都市を中心とする經濟的發展と、それに伴う庶民の地位の向上を物語っている。王衛平氏によれば、江南地域における庶民の奢侈風潮は、衣・食・住・行など日常生活の各方面に遍くおよんでおり、人々は

新奇な衣裝を競い、豪勢な宴會を催し、棟宇を崇び園亭を治め、山水の閒を行樂した⁽⁵⁵⁾。士大夫が社會的に最高の存在様式であった以上、それは庶民が目標とすべき規範であり、そしてこの時代、沈德符らが苦々しく述べるように、經濟力さえあれば、彼らの文人的な趣味生活を、質の面ではともかく、少なくとも外面だけでも眞似ることは可能だったのである。要するに庶民の士大夫化、文人化といえる現象が起こり、書畫骨董に對する需要の増加と價格の高騰は、彼らの參入によつてますます拍車がかかったわけである。

(四) 贋物の氾濫

書畫骨董に對する需要が増大し、金に糸目をつけない蒐集家が續出する一方で、それを目當てに贋作を製造・販賣し、一儲けしようとする者も續出したことは、同時代の數々の文獻からも明らかである。贋作の問題はこの時代に始まったことではなく、南宋の時代からすでに問題となっており、贋物が氾濫する狀況下にあつて、收藏家や鑑賞家は眞贋の辨別に腐心し、その方法も發達したが、⁽⁵⁶⁾明末に至つてその問題はさらに規模が大きくなり深刻化した。

沈德符が「眞贋も復た辨ずべからず、以て沈・唐之畫を、上せて荊・關と等しくし、文・祝之書を、進めて蘇・米に參するに至る。其の倣何れに極まるかを知らず」と言うように、この時代、いわゆる吳派の書畫の人氣が高まり、それに伴つてそれらの贋作が大量に出回つた。李日華が贋作と鑑定したものは『味水軒日記』にも多數登場する。書畫の主なものには、沈周『仿梅道人』四幅・『仿倪雲林小景』・中堂四軸、唐寅『疊嶂飛泉』・『江村萬里圖』、文徵明『赤壁圖』・『仿梅花道人』畫冊、などが挙げられるが、

又た文文水の山水一軸、筆意は縱横酣暢にして、極めて董花苑の家法を得たり。陸五湖の題句も亦た佳なり。奈んせん無賴子の爲に五湖の詩柄中の「文水」の二字を將て剔去し、「大痴」の二字に改めらる⁽⁵⁸⁾。と、題跋を改作して、文嘉の作品を黃公望の作品に仕立てあげたり、

八日、夏賈、文徵仲『存菊圖』僞本を以て來たり、意態甚だ驕れり。余、語らざること久しくして、徐に所藏せる眞本を出して并觀せしむれば、賈、斂避するを覺えず。所謂、眞者側に在れば、慙惶人を殺す者ならんや、笑う可し。是の卷、余、購藏せること二十年餘なり。⁽⁵⁹⁾

ということが起るほどであつた。彼自身、このような状況にはうんざりすることもあつたようで、

數日來連けて僞蹟を觀る。柯敬仲『管仲姬竹』、趙子昂『柳陰漁話圖』、王右軍清晏帖、蔡君謨諸公跋語、高彥敬『雲山』。近日賈客の連臚益艦し、紈袴の遊從の逐逐として相往來する者、率ね此物なり。之が爲に三嘆す。⁽⁶⁰⁾と述べている。

沈德符が「骨董は自來贗物多く、吳中尤も甚だし。文人は皆借りて以て糊口す」⁽⁶¹⁾と述べるように、商人のみならず、文人が積極的に贗作に協力することによって、蓄財に勵むことが一般化したのである。それはまた、増大し続ける需要に應えるためでもあつた。自らの技能を生かして職業的に贗作を行う人物は、『味水軒日記』にもしばしば登場する。

里中に朱肖海なる者、名は殿なる有り。少くして王羽士雅賓に従いて遊び、因りて書畫の間に盤桓するを得。蓋し雅賓は文衡山先生の門より出で、鑒古に於いて頗る具眼すれば、斷練壞楮の應に移易補款すべき者を得る毎に、輒ち朱生をして之を爲さ令む。朱必ず閉室寂坐し、揣摩成れば而る後下筆す。眞に人をして優孟之眩有ら令む。頃る遂に自ら贗物を作りて人に售り、歛賈の浮慕なる者、尤も其の欺を受く。又蘇人之が爲に搬運する有り。三百里内外、皆其の神通の及ぶ所なり。⁽⁶²⁾

この人物の贗作商賣について、李日華は「其の衣食此に於いてするを念えば、攻むるに忍びず」と述べている。また、沈德符は、王穉登が贗作を作つて生計を立てていたことを述べ、贗物を生計の資としながら贗物を見破ることのできない彼を皮肉っている。⁽⁶³⁾

この時代には、れっきとした文人が自ら贗作に手を染め、あるいは贗作を公認し、門人に代作させることまでが行われ

た。例えば董其昌は、「董文敏は應酬に疲るれば、毎に倩趙文度及び雪公に代筆せしめ、親しく書款を爲⁽⁶⁴⁾したという。そのほかにも、明末にあつては、明らかに商賣上の意圖を持って贋作を製造し、また、文人としての名聲を利用して、贋作を眞筆と偽つてお墨付きを與えることが積極的になされ、もはや眞贋を見分ける事は殆ど不可能になった。

近日書畫は道斷たり。賣る者は賣らず、買う者は買わず、蓋し偽を作する者多く、給を受くる者少なからざるに由り、相戒めて齋を吹き、復た敢えて頭を此の中に入れざる耳。⁽⁶⁵⁾という状況だったのである。

李日華のもとには、書畫の鑑定・品評を依頼する者がしばしば訪れ、また彼自身の題跋を求める者が多かったことは、『味水軒日記』の多くの記事が示すところである。例えばこういう記事がある。

沈伯遠人をして其の尊人の所藏せる卷軸を持して來たらしめ評定を求む。

そこで彼は、劉松年「孟公提轄圖」及び宋思陵行書眞蹟なる作品を鑑賞し、後者についてこのような鑑定を下した。

竹嬾曰く、按ずるに隆興は乃ち孝宗の年號なり。重華既に内禪を受け、力めて孝道を行い、宮中をして遍く太上の書を習わしむ、此れ孝宗の手筆爲ること疑い無きなり。而れども謬者題して思陵と爲す。余又た曾て友人吳公甫の收めたる一卷を見るに、目して思陵の雪賦と爲すも、中に構字を皆闕筆と作す有り。思陵の諱違なるを以て、故に其の嫌名を避く。則ち亦た思陵の書に非ず。⁽⁶⁶⁾

このほかにも、李日華の友人から商人に至るまで、同様な記事は枚舉に暇がない。

李日華は、彼のもとに持ち込まれるそれらおびただしい數の物に對して、彼が具體的にどのような物を好み、どういう順序で評價していたかの格附けを行っている。

余因りて戲に評古の次第を爲して云えらく、晉・唐の墨迹は第一。五代・唐・北宋の圖畫は第二。隋・唐・宋の古帖は第三。蘇・黃・蔡・米の手迹は第四。元人の畫は第五。鮮于・虞・趙の手迹は第六。南宋馬・夏の繪事は第七。國

朝沈・文の諸妙繪は第八。祝京兆の行草書は第九。他名公の雜札は第十。漢・秦以前の彝鼎丹翠煥發なる者は第十一。古玉珣璣の屬は第十二。唐硯は第十三。古琴劍の卓然名世なる者は第十四。五代宋の精板の書は第十五。怪石の嶙峋として奇秀なる者は十六。老松の蒼瘦なる、蒲草の細きこと鍼杪の如き、並びに佳盆を得たる者は第十七。梅竹諸卉の清韵なる者は第十八。舶香の蘊籍なる者は第十九。夷寶の異麗なる者は第二十。精茶の法醞せるは第廿一。山海の異味は第廿二。瑩白の妙磁・祕色の陶器は古今を論ぜず第廿三。⁽⁶⁷⁾

これは、明末における文人の好尚の範圍とその價值觀を、ほぼ網羅・整理したものといえる。

明末には、鑑定のための手引き書や、書畫に附された諸家の題跋や印記および關連記事などを整理して、賞鑒の用に供するための書物が多數刊行された。前者の代表的なものとしては、曹昭『格古要論』一三卷・高濂『遵生八牋』一卷・屠隆『考槃餘事』四卷・文震亨『長物志』一二卷などが挙げられる。これらの手引き書は趣味生活全般にわたる總合的な指南書であり、いずれも眞贋の識別方法や、鑑賞の要點について、事細かに記している。そして後者の著名なものとしては、郁逢慶『書畫題跋記』一二卷・都穆『鐵網珊瑚』二〇卷などが、それぞれ挙げられる。題跋とは、書畫を鑑賞し、その作品や作家などについて所感や由來あるいは考證などを記すものであり、宋代から盛んとなったが、元から明に至って、題跋や印記を記すことが定着してくると、今度はさらに別な意味を持ち始めることになった。⁽⁶⁸⁾つまり、著名な賞鑒家が題跋や印記を記した書畫は、その人物が良品と認めたことの、いわば保證書となったのである。これらはいずれも、この時代に一流と目され、また一流を自任していた文人達の手によってまとめられたものである。李日華の著作である『六研齋筆記』『紫桃軒雜綴』などの隨筆もまた、趣味生活の指南書や、題跋集としての性格を兼ね備えたものであり、彼の同時代人の間に廣く出回っていた。⁽⁶⁹⁾

せっかく書畫骨董を集める以上はよいものを、なるべくならば本物が欲しいと思うのは、この時代に限らずとも當然の心理である。この時代、多くの者が鑑賞と蒐集の競い合いに熱中し、それに應じて市場にはものが氾濫した。しかもその

多くが贗物であり、その辨別は困難を極めた。このような現實の中で、結局最終的な據り所となるものは、實力・名聲ともに兼ね備えた、一流の賞鑒家の鑑賞眼であった。彼らが李日華に求めた役割も、單に彼らの所有する書畫・骨董の眞贋の判定のみならず、一流の賞鑒家としての彼自身による價値の保證であり、作品の格附けを行うことであつた。

二 文人と山人

(一) 山人の活躍

明末の文人及び文化狀況を考える上で、この時代に多數登場した山人について検討したい。

明末の文人の趣味生活に深く関わつたのが、詩文を作し書畫を書くという、いわば文化的技能をもつて、各地の大官・名士・富家のもとに出入りする者たちである。當時から山人に對する評價は賛否兩論であり、山人嫌いの沈德符は、

意わざりき數重年來、出遊せる無籍の輩、詩卷を以て遍ねく達官に贗す。亦た之を山人と謂う。嘉靖の初年に始まり、今上の今歲に盛んなり。⁽⁷⁰⁾

と述べている。しかしながら、謝肇淛が、

唐自り宋元に及ぶまで、書畫を善くする者は往往にして搢紳士大夫より出ず。而して山林隱逸の蹤は、百に一つを得ず。……蓋し國朝、布衣處士の書畫を以て名を顯わす者絶えざるは、蓋し富貴なる者文翰を薄んじて不急の務と爲し、仕進に溺情するに由りて、復た留心せず、故に山林の士をして、擅に其の美を得さしむ。是も亦た以て世變を觀るべきなり。⁽⁷¹⁾

と記したように、彼らの中からは、詩文・書畫においてこの時代を代表する者が續出したのである。文化の新たな擔い手として明末に多數登場したこれら山人と呼ばれる人々が、いわゆる士大夫・文人の領域であつた従來的な「雅」文化に參

入していく一方、「俗」文化の方面へ接近していく士大夫・文人も存在し、兩者の相互依存的關係から明末の特色ある文化が生み出された。

明代の山人が、文人の墮落した形態であるという從來の見解に對し、鈴木正氏は「帶冠山人」と「布衣山人」という二様のあり方を指摘された。⁽⁷²⁾金文京氏はこれを踏まえて、文人の雅號である前者と、ある特定の技能に従事する人々に對する一般的呼稱、いわば職稱としての後者とを區別し、後者が、山間に隱棲した方士にその起源を持つ人々であり、いわゆる士大夫・文人とは別個の存在であると述べられた。「近世以後の社會にあつては、都市の中にこれら隱者がその技藝によつて生きて行けるだけの餘地が大きく開かれてたとも言いうるであらう。このような隱者の世俗化、言い換えるなら世を出る「出世」から世に出る「出世」への轉換こそは、近世社會を特徴づける大きな變化であり、近世の様々な文化的現象は多かれ少なかれこのことに關連しているといつても過言ではない。」⁽⁷³⁾という指摘は、明末の文人を取り巻く社會的・文化的狀況のありようを理解する上で示唆に富むものである。

「中國における町人文化」の成立・發展と、知識という技能を元手に生活する、山人を始めとする舊來の粹組みから外れた知識人層の勃興とは、傳統的な士大夫・文人のありようをも變質・解體させずにはおかなかつた。文房清玩という文人趣味の最たる領域にまで、その影響は及んだのである。

(二) 李日華と山人

そもそも、李日華はその生い立ちから、山人と深い關わりがあつた。

仕官以前の李日華の經歷に關しては、『梅墟先生別錄』上卷に詳しい。それによると、李日華は父應筠から學問で身を立てるよう期待されていたが、家が貧しかったため、親戚の縁で、周履靖のもとで教育を受け、學問的基礎を形成したという。周履靖は、字は逸之、平生最も梅を好み、自ら梅顛道人と號した。嘉興城外の白苧郷に住み、梅樹數百株を住居の

周圍に植え、布衣のままで悠々自適の生活を送った。

周履靖は、早くから李日華の文才に大きな期待を寄せ、英才教育を施して、文名をもって世に顯れるようはからったことは確かなようである。

先生悉く所藏の書を出して余に教え、後即ち晴雪齋中に讀書し、益々先生の言論に親しむを得。……余、青衿なるを以て肄業すと雖も、而れども吟弄を雅好し、嘗て戯れに詩文を以て先生に呈す。先生擊節嘆賞して曰く、異日詞章を以て江左に起つ者は是の子なりと。⁽⁷⁴⁾

萬曆二六年、周履靖の編集した『夷門廣牘』が刊行されたが、茅坤・屠隆・文嘉・王穉登など當時の多くの著名人が序文を寄せ、また、校訂者として、陳繼儒・項元汴・賀萬祚・劉鳳など、やはり著名人が協力するなど、彼の交友の幅廣さをうかがうことができる。彼らの間に、李日華の名が知られていたことは、この『夷門廣牘』所收の『梅墟先生別錄』に寄せられた、黃洪憲・彭輅の序跋から伺うことができる。後に彼は、周履靖の知識、生活様式、及び交遊關係の地盤をそっくり引き継ぎ、その趣味をさらに發展・洗練させていくことになる。

「答年家俞企延茂才」⁽⁷⁵⁾なる書簡によると、一二歳になってから本格的に學問に志し、手あたり次第に讀書を始めた李日華が、學校試に應じて生員となつたのは、一五歳、萬曆七年のことであつた。このころ彼は、自分の將來に關して、

將に盡く諸の應舉の學を廢し、自放して山人詞客と爲りて以て老いん。

と考へるようになった。早熟な秀才としてその文才を認められた彼は、自らも師の周履靖と同じ道を進むことを考へたのである。

周履靖はまた、出版業に深く關わつていた一人であつた。萬曆『嘉興府志』の傳には、彼を評してこう書いている。

性は異書を嗜み、訪求して寒暑に閒無し。詩文書繪の事事、喜びて先輩の著述する所を臨摹すること最も多し。朱少宰之蕃謂えらく、其の好古は析産の詭りを嫌わず、陳詩は賣名の訾りを避けずと。⁽⁷⁶⁾

實際、彼の著書は、生前から膨大な量が出回っており、『梅墟先生別錄』下にも二九種類が挙げられている。おそらく、これらの出版を通じて得られた名利によって、古物を收藏し、「析産」「賣名」の非難を受ける事にもなったのである。當時から様々な批判の対象となっていた、山人の典型的な生活ぶりである。⁽⁷⁷⁾

そこで李日華は、雲間の陳繼儒のもとへ進路相談に赴くが、「先生時に制義を攻め、余の奇趣を賞す。而れども其の罷擧を聽さざるなり」と、その心意氣は認められたものの、科擧受験の道を斷念する事には反對された。そこで彼は馮夢禎のもとで學業を繼續する。⁽⁷⁸⁾ 陳繼儒もまた書畫詩文を善くし、董其昌・項元汴・李日華ら、當時の著名な賞鑑家たちとの交友で著名な山人である。李日華は終生彼に兄事し、互いの居所をたびたび往來している。一日、彼は李日華のもとを訪問して、

陳眉公先生來たりて書畫を索觀す。極めて王叔明「秋山草堂」一幅を喜び、以爲らく「清辨圖」の上に在りと。又た亨兒畫冊を觀る。題語に云えらく、會嘉畫海に游戲し、無師自然之智を得たるに似たり。然れども自ら子久・叔明・懶瓚・幼文、種種具に筆端に在り。書學の深詣此の如ければ、豈に徒に南宮の虎兒たらんや、當に是れ大小李將軍の復た現れたるべきのみ。⁽⁷⁹⁾

などと、李日華・肇亨親子を米芾・米友仁親子や李思訓・昭道親子になぞらえて褒め上げた。また、彼の題跋が附された書畫も多く記録されている。

結局李日華の父の目論見は見事に成功し、李一族は、嘉興の紳士社會の仲間入りを果たす。⁽⁸⁰⁾ 『味水軒日記』に登場する李日華は、すでに詩文や書畫をもって名士のもとを出入りする山人的立場から、山人を迎える側の立場になって以降の彼であるが、士大夫としての彼の經歷は、山人なくしてはありえなかったのである。

また、先にみた項元汴や汪繼美らは、文人としての實力は充分でありながら、官途にはつかず、いずれも布衣のままで一生を終え、それぞれ墨林山人、愛荆居士を名乗った。錢希言によれば、

詞客は山人と稱し、文士も山人と稱し、徵君通儒も山人と稱し、喜遊子弟も亦た山人と稱し、説客辯卿、謀臣策士も亦た山人と稱し、地形日者、醫相訟師も亦た山人と稱し、甚しき者は、公卿大夫其の封爵を棄てて而して山人と署し別號と爲す。⁽⁸¹⁾

という、つまりありとあらゆる階層の者たちが山人を名乗り一種の社會現象ともいえる状態であり、山人を迎える側も往往にして山人を名乗っていたのである。⁽⁸²⁾

沈德符は山人の筆耕を皮肉ったが、明末にあつて、賣文賣畫を行わなかつた文人はまず見あたらず、潤筆料を金銭で受け取ることが一般化していた。潤筆とは、墓誌銘・書物の序文・その他の詩文や、さらには書畫を文人に依頼し、その謝禮として贈られる錢物のことを指す。⁽⁸³⁾ 潤筆による収入は士大夫の文人生活を支える一つの財源であり、宋代以降潤筆によつて生計をたてる者も現れ、これを職業とした者が山人であつた。この當時の都市部では、詩文・書畫の知識や技術に對して、幕僚や食客といった形で需要があり、それらの技能を元手に生計をたてていくことが可能であつた。やはり傳統的な文人觀からすれば墮落であり、當時から批判も多かつた。馮夢禎は、彼のもとに押し掛けてくる山人について、

此の輩文墨を以て四方に餬口す。借を奨めて游揚せしむるに非ざれば、則ち立ちに槁死せん。稍や周旋を與え、自振するを得しむるは、亦た菩薩普度の法なり。

と言ひ、これに對し沈德符は「余の心其の誠言に非ざるを知る。然れども敢えて深く詰らず」といつている。⁽⁸⁴⁾ 晴れて士大夫となつた後の李日華の山人觀も、あるいはおおむねこうだったのかも知れない。

(三) 文人と山人の境界線

しかしながら、賣文賣畫に精を出していたのはいわゆる士大夫・文人を含めた、文筆を業とする者ほぼ全員だったのであり、彼らは様々な人々の求めに應じて詩文・書畫を盛んに作つたのである。李日華自身も、潤筆料として書畫骨董を受

け取っていたことが『味水軒日記』のあちこちに述べられており、歸莊に至っては「筆耕説」の中で、むしろ誇らしげにこう述べる。

吾が家は先太僕より文を賣り、先處士は書畫を賣り、筆耕を以て自給する者世を累ぬ。亂に遭いて家破れ、先處士見背し、余飢えて路に窘困し、死に瀕する者數びなり。比するに年來、余の文章書畫の名稍や著しく、頗る來りて求むる者有り、頼みて以て饘粥を給す⁽⁸⁵⁾。

その一方で、あくまで素人の餘技として書畫に關わるという態度を強調し、俗物どもとは一線を劃そうとする者もあつた。當時一流と目された文人には多かれ少なかれそうした傾向があり、「余の繪事は萬も稱するに足らず。然れども意に留める者有らば、亦た頗る之に溺る」と述べるように、李日華もその一人である。

董其昌は、李日華の描いた扇に題して、「今の士大夫の山水畫を習う者、江南は則ち梁溪鄒彥吉、楚は則ち郝黃門楚望、燕京は則ち米友石、嘉興は則ち李君實、俱に寄尙清遠、登高能賦にして、畫工の蹊徑に落ちいらず」と評したが、これに對し李日華は、「數公俱に豪達なれば、天下其の望に群走す。余悶悶として一丘一壑を宇る」と述べている⁽⁸⁷⁾。官僚としての經歷からいえば、『味水軒日記』の執筆された時期は、李日華にとって不遇の時代であり、こうした感慨は隨所で述べられている。彼自らの意識の上では、いかに畫業に關して玄人はだしであらうとも、あくまで自分の本領は士大夫であつた。

さきに述べた眞贋を鑑定する際の態度にもそれは現れており、

近日蘇人の書畫舫、悉く僞惡の物を滿載す。然れども晴窗無事なれば、眞贋を論ぜず、一一卷を舒げ指摘すれば、盡く日を消し年を忘る可し。所謂眞を證するは固より樂なり、僞を究むるも亦た快なり⁽⁸⁸⁾。

と述べており、また別の所では、

臨本僞書畫も、亦た盡くは棄てるべからざる者有り。大都の氣韻神采は、遠く古人に逮ばずと雖も、而れども布置脈

理に、自ら尋ねべき者有り。善學せる者に在りては、融會して而して之に傾けるのみ。⁽⁸⁹⁾

とも述べている。彼にとって、作品の眞價は大きな關心事ではあったが、少なくとも眞價と作品の善し惡しとを結び付けて論じることには無かった。先にも見た通り、當時すでに眞價を見分けることは殆ど意味を成さなくなっており、李日華にとって重要だったのは、作品そのものの持つ優れた點を見極めることであつた。

好事者と賞鑒の家とは二等爲り。賞鑒家は、其れ篤好にして記録を遍く閱し、又た復び心得し、或いは自ら畫を能くするを謂う。故に收める所は皆精品なり。近世の人、或いは資力有れば、元より酷好に非ざれども、標韻を作さんことを意い、人より耳目を假りるに至る。此に之を好事者と謂う。⁽⁹⁰⁾

という言説が、明末にはしばしば引き合いに出されたが、賞鑒家としての李日華の名聲も、古典に對する豊富な知識と鑑賞經驗に裏附けられた確かな審美眼に基づくものであつた。彼はそうした自分の資質に對して自信を持っていればこそ、何物にも頓着せず、己の嗜好に従つて、日々多くの書畫骨董を鑑賞し、その善し惡しを品評し、感興の赴くままに題跋を附して娛しんだのである。このような態度は、良く言えば自由ものに捉われない、惡く言えば放恣で無責任なものである。

正統的な文人觀からすれば、山人はいわばエセ文人であつた。しかしながら、陳萬益氏が、山人という呼稱は「失意のうちに隱世する郷紳から、布衣身分の富商・無賴等に至るまでを包括するが、ただ一般的に言つて、山人と士人階層とは多くが重複する」ものである、という見解を示されたように、⁽⁹¹⁾この時代の兩者の性質や行動は重なり合う部分が多く、兩者の區別は困難であつた。そして、いわゆる士大夫・文人のものであつたはずの文房清玩趣味の世界の境界線も、以前に比べ次第にあやふやなものになっていき、結果として「俗」の方面に大きくその裾野を広げることとなつた。

おわりに

明末に至って、文房清玩趣味、とりわけ書畫骨董の愛好と蒐集は、個人で、あるいは親しい仲間同士の間で楽しむための身近なものから、かつて無いほど大規模なものへと變化した。折りからの經濟的發展に伴い、商品としての書畫骨董は市場に溢れ、これまで文房清玩趣味とは無縁であった庶民に至るまでが、様々な形でこの世界に參入することが可能となったが、このことは、これまでの文房清玩趣味の擔い手であった文人の、從來的なあり方にも大きな影響を及ぼした。知識人と民衆の間に介在し、様々な技能を武器に、明末の文化と社會に影響を與えた山人の活躍によって、彼らを區分する境界線は不明瞭になり、彼らは相互に深く關わり合つた。明末は、當時の人々によって、傳統的な社會秩序が崩壊した時期として捉えられているが、この點においてもその一端を見取ることができるのである。

こうした時代状況の中で、李日華は、郷里にあって、知識人から庶民に至るまで、文房清玩趣味を介して幅廣い人間關係を取り結び、賞鑒家としての名聲を獲得した。古原宏伸氏は、李日華を評して「自分の目を信じ、自分の日常の語彙を使って、自己の感性を表現している點で、董其昌と拮抗しうる唯一人の批評家と言えるだろう。李日華ほどの的確な觀察の記録は、彼以前にはほとんど見られない。……李日華の藝術に對する鑑賞は、新聞の社會面の記事と同じ關心、同じ水準を出ることのない、好事家としての趣味、道樂に過ぎなかった。情熱のあつたのは確かだが、董其昌のように寢食を忘れて熱中するという體驗は、李日華には遂に見られない」と述べられたが、あくまで素人の餘技として書畫に關わるという李日華の態度は、「和易安雅」と評された彼自身の資質もさることながら、傳統的な文人のあり方を強調し、俗物どもとは一線を劃すことによって、一流としての地位・名聲を保つためのものでもあった。

『味水軒日記』の時期以降、李日華は、「鴛鴦詩社」を主宰した嫡子肇亨やその友人の譚貞默・項聖謨らの世代との交友を深め、嘉興の文壇の重鎮として地方志編纂などの文化事業にも關わることになるが、紙幅も盡きたため、別稿に譲る

こととしたい。

註

(1) 李日華の傳記資料としては、譚貞默「中議大夫太僕寺少卿李九疑先生行狀」(『嘉興譚氏遺書』所收『碧澹三集』卷一)が最も詳しい。

(2) 錢謙益『列朝詩集小傳』丁下。

(3) 朱彝尊『靜志居詩話』卷一六。

(4) 『容臺集』卷首「太子太保禮部尚書思白董公行狀」。

(5) 『六軒齋筆記・二筆・三筆』(各四卷)は、『李君實先生雜著』及び『四庫全書』子部一〇雜家三所收。『紫桃軒雜綴・又綴』(各三卷)は、『李君實先生雜著』及び『橋李遺書』所收。『恬致堂集』は全四〇卷、國立國會圖書館所藏明刊本、及び内閣文庫所藏手抄本がある。

(6) 現存する刊本は、『嘯園叢書』所收本と、『嘉業堂叢書』所收本の二種類。崇禎『嘉興縣志』によれば、『味水軒日記』は二二卷となっており、おそらくさらに多年にわたって記録された日記が存在していたものと思われる。おもに日華の晩年に刊行された隨筆・畫論にも、これらの「日記」から抜粋・編集されたものが含まれている。

なお、抄本もいくつか現存しており、浙江省圖書館古籍部所藏のものは、趙晉齊による抄本を嘉慶一七年(一八一二)に筆寫したものである。また、北京圖書館古籍部所藏のものは、李含潛、及び鄒天嘉なる人物の題辭のみが附されている。

る。後者は、影印本の形で『北京圖書館古籍珍本叢刊』二〇(史部・傳記類)に收められている。

また、上海遠東出版社より標點本が出版され(一九九〇)、参照に便利である。

(7) 前掲註(1)「行狀」。

(8) 濱島敦俊「明末清初の均田均役と郷紳(四)——李日華『味水軒日記』をめぐる」(『史朋』一六 一九八三)。

(9) 古原宏伸「晩明畫評」(『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下 汲古書院 一九九〇)。

(10) 荒井健編『中華文人の生活』(平凡社 一九九四)。

(11) 中田勇次郎「文房清玩史考」。初出『大手前女子大學論集』四(一九七〇)、後『中田勇次郎著作集』第七卷(二玄社 一九八六)に收録。

(12) 『萬曆野獲編』卷二四「技藝」縉紳餘技。

(13) 『味水軒日記』卷一 五月二二日(以下『味水軒日記』の記事に關しては、卷號と月日のみを註記)。

(14) 卷四 二月一八日。

(15) 卷三 六月五日。

(16) 李日華『恬致堂詩話』(學海類編本による)。

(17) 『紫桃軒雜綴』卷三。

(18) 卷六 一一月二六日。

- (19) 前掲註(11)中田論文。
- (20) 荒井健「明末紹興の庭——祁彪佳と寓園について——」
(前掲註(10)『中華文人の生活』所收)。
- (21) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」好事家。
- (22) 卷二 六月一六日。
- (23) 『恬致堂集』卷三八「題門人魯孔孫畫冊」。
- (24) 『六軒齋筆記』卷一。
- (25) 項元汴と、彼の收藏にかかる書畫については、鄭銀淑『項元汴之書畫收藏與藝術』(文史哲出版社 一九八四)に詳しい。
- (26) 卷二 二月一〇日。
- (27) 『曝書亭書畫跋』「書萬歲通天帖舊事」。
- (28) 『韻石齋筆談』卷下「項墨林收藏」。
- (29) 曾布川寬「董其昌の文人畫」(前掲註(10)『中華文人の生活』所收)。
- (30) 卷一 五月二三日。
- (31) 陳繼儒『妮古錄』卷四。
- (32) 卷二 十一月二九日。
- (33) 『恬致堂集』卷二五。
- (34) 卷八 六月二日。
- (35) 『恬致堂集』卷三七、三八。
- (36) 例えば王鈞『寓園雜記』卷六「余家書畫」。
- (37) 『萬曆野獲編』卷八「內閣」籍沒古玩。嘉靖四四年五月に、これら籍沒された嚴嵩所藏の書畫を看閱した文嘉は、全ての書畫を見終わるのに三ヶ月を費やした後、『鈴山堂書畫記』一卷を著し、「法書」「名畫」の二項目に分けて時代順に配列している。法書は一四三件、名畫は三二七件となっている。
- (38) また、張丑は、韓世能の家藏にかかる法書名畫の數々を、題跋や收藏印とともに列舉した目錄を作成した。『南陽法書表』一卷は、韓世能の所藏する法書七二件を五項目に分類して記し、『南陽名畫表』一卷は、同じく韓世能の所藏する繪畫九五件を同じく五項目に分類して記録した。四庫提要には「兩表の列する所、皆韓世能家藏の眞蹟なり」とある。
- (39) この顛末は、福本雅一「まず董其昌を殺せ」(『董其昌の書畫』二女社 一九八一)に詳しい。
- (40) 『四友齋叢說』卷二八「畫」一。
- (41) 卷四 三月一日。
- (42) 卷四 四月二日。
- (43) 卷四 七月二九日。
- (44) 『萬曆野獲編』卷二四「緞輔」廟市日期。
- (45) 『觚不觚錄』。
- (46) 卷二 二月二八日。
- (47) 卷一 五月一七日。
- (48) 『恬致堂集』卷三四「祭沈超宗親家文」。
- (49) 卷一 七月七日。
- (50) 卷一 八月二日。潘光旦『明清兩代嘉興的望族』によれば、「長蕩の沈氏」は代々富裕な一族として知られ、文名の高い者を多く輩出した。超宗の父自邵は、字は茂仁、几軒と號した。萬曆五年の進士(崇禎『嘉興縣志』卷一二)。「萬

曆野獲編』の著者として有名な徳符は、超宗の弟である。また、沈超宗の息子大詹は、李日華の娘と結婚し、娘の翠華、鳳華、瑤華の三姉妹は、詩文で名を馳せた。瑤華は項鼎鉉（項元汴の兄篤壽の孫）に嫁いでいる。

(51) 卷二 六月九日。

(52) 卷二 七月二十九日。

(53) 『長物志』卷五「書畫價」。

(54) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」好事家。

(55) 王衡平「再論明清時代江南地域の奢侈風潮」（『廣島東洋史學學報』創刊號 一九九六）。

(56) 中砂明德「士大夫のノルムの形成——南宋時代——」（『東洋史研究』五四—三 一九九五）。

(57) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」時玩。

(58) 卷六 二月七日。

(59) 卷六 一〇月八日。

(60) 『六軒齋二筆』卷一。

(61) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」假骨董。

(62) 卷二 二月二七日。

(63) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」假骨董。

(64) 朱彝尊『曝書亭集』卷一六「論畫宋中丞十二首」。

(65) 卷四 閏十一月一八日。

(66) 卷五 七月一日。

(67) 卷八 一月一七日。

(68) 青木正兒「題畫文學の發展」（『青木正兒全集』卷二 春秋社 一九七〇）所收。

(69) 項鼎鉉『呼桓日記』卷二の記事によれば、「六月四日、午過ぎ大雨。李君實、手條せる庚戌十一月十二日の日記を相示す」とある。また、『呼桓日記』卷三には李日華の手になる『雅笑錄』を閱讀した記事があり、成德潛は李日華の手になる『書畫想像錄』に言及している（『味水軒日記』卷二）。いずれも萬曆『嘉興府志』などに記されているのみで、おそらく明清交代の際に散逸したと思われるが、李日華の著作が當時既に知友の間に參觀に供されていたことがわかる。『呼桓日記』の手抄本は北京圖書館に所藏されており、『北京圖書館古籍珍本叢刊』二〇（史部・傳記類）で参照可能。

(70) 『萬曆野獲編』卷二三「山人名號」。

(71) 『五雜俎』卷七。

(72) 鈴木正「明代山人考」（『清水博士追悼記念明代史論叢』一九六二）。

(73) 金文京「中國近世における知識人の性格——明代の山人を手がかりとして」（『中國史學』第七卷 一九九七）。

(74) 『梅墟先生別錄』上卷（『東門廣讀』第八七卷）。

(75) 『恬致堂集』卷三二。

(76) 萬曆『嘉興府志』卷一四「詞翰」。

(77) 文人と山人が出版事業において結びつき、商業的成功をおさめた事例に関する論考には、大木康「山人陳繼儒とその出版活動」（前掲註（9）『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』下 所收）、井上進「書肆・書賈・文人」・金文京「湯賓尹と明末の商業出版」（いずれも前掲註（10）『中華文人の生活』所收）などがある。

(78) 國立國會圖書館所藏明刊本『快雪堂集』卷四七より卷六二に所収の『快雪堂日記』には李日華の來訪がしばしば記録されている。

(79) 卷四 十一月二〇日。

(80) 卷八 七月一日に、李日華は始祖李晟の祭文(『恬致堂集』卷三三「通族祭西平忠武王侍郎忠愍公觀文殿學士長孺公文」)を書き、祭祀を催した。列席者の中には李原中(初名箇廣・萬曆一七年進士)、李衷純(原中の従弟・萬曆四〇年舉人)などの名が見え、李日華が嘉興の李氏一族を代表する存在となっていたことがうかがえる。

(81) 『戲瑕』卷三「山人高士」。

(82) 『萬曆野獲編』卷二六「玩具」假骨董。

(83) 佐伯富「士大夫と潤筆」(『内田吟風博士頌壽記念東洋史論

集』同朋舍 一九七八)。

(84) 『萬曆野獲編』卷二三「山人」山人愚妄。

(85) 『歸莊集』卷一〇・雜著。

(86) 『竹嬾畫牋』。

(87) 卷四 正月八日。

(88) 卷六 二月七日。

(89) 『紫桃軒雜綴』卷三。

(90) 米芾『畫史』。

(91) 陳萬益『晚明小品與明季文人生活』(大安出版社 一九八八)。

(92) 森正夫「明末の社會關係における秩序の變動について」

(『名古屋大學文學部三〇周年記念論集』一九七九)。

(93) 前掲註(9)古原論文。

ON ARTISTIC TASTE OF LI RI-HUA 李日華—AN
INTELLECTUAL OF THE LATE MING AS SEEN
FROM HIS *WEI-SHUI-XUAN RI-JI* 『味水軒日記』

INOUE Mitsuyuki

Li Ri-hua, one of the typical intellectual in the late Ming, together with Dong Qi-chang 董其昌 were equally admired as connoisseurs of *objets d'art* and curios. Li's diary, *Wei-Shui-Xuan Ri-Ji* covers the years 37—44 of Wan-li 萬曆 (1609—1616), and by this we can observe his daily life in his hometown, Jia-xing 嘉興. This article attempts to examine the artistic taste of the intellectual and hence the cultural activities in those times by referring to the appreciations of arts like calligraphy, painting, ink slab, porcelain and all sorts of antiques described in this diary.

Accordingly, appreciation and collection of *objets d'art* had originally been a personal taste of the intellectual, but had a vogue up to the late Ming. In those times, especially in the Jiang-nan region 江南, many collectors who flaunted their considerable collections of arts appeared. Xiang Yuan-bian 項元汴, his relative, Wang Ji-mei 王繼美 and his son, Wang Ke-yu 王弼玉 were typical ones. They had been living in Jia-xing for generations, and Li Ri-hua was able to appreciate many *objets d'art* through companionship with them.

With rapid economic development, the intellectual and even common people got absorbed in appreciation and collection of *objets d'art* in those days. As *objets d'art* became commodities and were widely traded, there was a sharp rise in demand for them, and their prices went up finally. At the same time, forgeries were produced in large quantities, so it became quite difficult to discriminate between the genuine and the fake. According to the diary, Li Ri-hua, as a famous connoisseur, was often asked to authenticate various *objets d'art* and curios and set prices for them.

Besides, the article also discusses the relationship between “Shan-ren” 山人 and the intellectual. “Shan-ren” were newly-risen intellectuals in the late Ming, who lived by their knowledge and skills and did not engage in

any official position. “Wen-ren” 文人 had originally referred to the so-called “Shi-da-fu” 士大夫, but when some of the “Shan-ren” were regarded as the typical intellectual in the late Ming, the dividing line between the “Wen-ren” and the “Shan-ren” became ambiguous. Li Ri-hua was able to lay his academic foundation under the influence of the typical “Shan-ren” such as Zhou Lu-jing 周履靖 and Chen Ji-ru 陳繼儒 in those times. However, he had been trying to act as the most eminent intellectual without doing the job of making or appraising arts since he had become an official.

**A RESEARCH ON THE SYSTEMS OF ZHAN-TIAN 占田,
KE-TIAN 課田 AND ZU-DIAO 租調 UNDER THE
WESTERN JIN DYNASTY 西晉**

ZHANG Xue-feng

Despite the considerable amount of recent studies about the systems of zhan-tian 占田, ke-tian 課田 and zu-diao 租調, under the Western Jin dynasty 西晉, most of the studies focus on deciphering the existing literature, but pay hardly any attention to the actual condition of agricultural production on which the formation of the above systems were based in that time. Hence this article attempts to re-assess the systems based on my recent research of the zu-diao system under the Wei dynasty from the viewpoints of labour cultivating capacity and productivity per *mu* 畝. It can be concluded as follows. Actually, zhan-tian means neither the limitation of private land holdings or the procedure of approving private land holdings as previous studies suggested nor the rule allowing every person to hold certain area of land, but the regulation over the cultivated land managed by the original agriculture officer 典農官 in that time. Also, ke-tian is not the official land distributed to the peasant and its cultivation is compulsory or semi-compulsory as recent studies asserted but a land tax upon the peasant according to the unit of *mu*. In other words, it is a kind of tax. Thus there was no cultivated land called zhan-tian nor ke-tian in the Western Jin dynasty. Despite the record that each man 丁男 is to